

ろばの子（グリム童話 一四四番）

昔むかし、あるところに、ひとりの王さまとおきさきがいました。ふたりはとても金持ちで、ほしいと思うものはなんでも手に入りましたが、ただ、子どもだけはありませんでした。おきさきは、昼も夜もそのことを悲しんでいました。

それでも、とうとう神さまが、願いをかなえてくださいました。ところが、子どもが生まれてみると、それは、人間の子どもではなくて、ろばの子でした。

おきさきはこれを見ると、悲しみのあまり、

「ろばを生むくらいなら、子どもを生まなければよかった。川の中へ投げて、魚にでも食べてもらいましょう」といいました。けれども王さまは、

「それはいかん。神さまがこの子をくださったのだから、この子はわしの息子であり、あつぎだ。わしが死んだら、王座にすわり、王冠をかぶらなければいけない」といいました。

ろばの子は、たいせつに育てられ、すくすくと成長しました。ふたつの耳も、りっぱに、ますます高くのびました。この子はとても明るい子で、あちこちはねまわって遊びました。とくに、音楽がすきで、ある有名な音楽家のところへ行つて、

「ぼくにリユートのひきかたを教えてください。あなたのように、じょうずにひきたいんです」

といました。すると、音楽家は、

「ああ、かわいい王子さま。それは、あなたにはむりでしょう。あなたの指は大きすぎて、リュートをひくのにむいていません。げんが切れてしまうでしょう」と、答えました。

けれども、なんといってもむだでした。ろばの子は、どうしてもリュートをひきたい、といい、しんぼうづよく、熱心に習いました。しまいには、先生と同じようにじょうずにひけるようになりました。

あるとき、ろばの子は、もの思いにふけりながら散歩しているうちに、泉のほとりにやってきました。中をのぞきこんで見ると、鏡のようにすんだ水に、自分のろばのすがたがうつっていました。これを見て、ろばの子はすっかり悲しくなり、忠実なけらいをひとりだけつれて、広い世の中へ出ていきました。

ふたりは、あちらこちら旅してまわるうちに、いつのまにか、ある年をとった王さまがおさめている国へやってきました。ろばの子は、

「ここに泊めてもらおう」といって、お城の門をたたき、

「客が来ました。門をあけて、中へ入れてください」と、大声でいきました。

けれども、門があけてもらえないので、ろばの子は、そこに腰をおろし、リュートを取り出して、前足で、とてもきれいにひきはじめました。すると、門番は、目をまるくして王さ

まのところへかけていって、

「王さま、お城の門の前にろばの子がすわって、リュートをとてもきれいにひいています」と、報告しました。王さまは、

「そうか。では、その音楽家をこちらへ通しなさい」といいました。

ろばの子が入ってくると、宮廷の人びとは、みんな、このリュートひきのことをわらいました。そして、ろばの子は、身分の低い兵隊たちのあいだにすわらされて、そこで、食べ物をもらうことになりました。ろばの子は、きげんをわるくして、

「ほくは、なみのろばの子じゃない。ほくは、高貴な生まれのろばの子なんだ」といいました。人びとは、

「まあ、いいから、兵隊たちのなかに入ってすわれ」といいましたが、ろばの子は、

「いやです。ほくは、王さまのとなりですわりたいんです」と、いいはりました。王さまには、たったひとりの、すばらしく美しい王女がありました。王さまは、じょうきげんに、わらって、「そうか。では、おまえの望みどおりにさせてやろう。ろばの子よ、わたしのとなりへおいで」といいました。それから、

「ろばの子よ。おまえは、わしのむすめが気に入ったか」とたずねました。ろばの子は、王女のほうへ顔をむけて、じっと見ていましたが、

「なみはずれて美しい。こんなすばらしい王女さまは、まだお会いしたことがありません」といいました。すると、王さまは、

「そうか。では、むすめのとりにすわらせてやろう」といいました。

「それは、とてもうれしいことです」と、ろばの子はいつて、王女のとりにすわり、上品に、ぎょうぎよく、ごちそうを食べました。

上品なろばの子は、しばらく王さまの宮廷にいました。けれどもそのうちに、

（こんなことをしていたって、しかたがない。もう、国へ帰らなくてはいけない）と思い、うなだれて、王さまの前へすすみでて、別れをつけました。けれども、王さまは、ろばの子がとても気に入っていたので、

「ろばの子よ。どうしたんだ。まるで、酔を入れたつぼのように、すっぱそうな顔をしているじゃないか。ここにいなさい。おまえのほしいものならなんでもやろう。金貨がほしいのか」といいました。ろばの子は、

「いいえ」といつて、頭を横にふりました。

「おまえは、すばらしい宝石がほしいのか」

「いいえ」

「おまえは、わしの国を半分ほしいのか」

「いいえ、ちがいます」

すると、王さまはいいました。

「おまえを、満足させることができるものが、なんなのか、わしにわかればいいんだがなあ。おまえは、わしの美しいむすめを妻にしたいのか」

そのとたん、ろばの子は、

「そうなんです。王女さまがほしいんです」といつて、とつぜん明るく、ほがらかにまりました。ろばの子は、ほんとうはそれがいいたかったのです。そこで、盛大で、ごうかな結婚式が祝われました。

夜になって、花嫁と花婿が寝室に入るときになると、王さまは、ろばの子が上品に、ぎょうぎよくふるまうかどうか心配になって、召使いに、寝室のものかげにかくれているように命じました。

ろばの子は花嫁といっしょに寝室に入ると、とびらのかぎをかけました。そして、あたりを見まわし、ふたりだけになったことをたしかめると、とつぜんろばの皮をぬいで、美しい王子になりました。そして、

「どうだい。ほくがだれであるか、わかっただろう。ほくが、きみにふさわしい花婿だということが、わかっただろう」といいました。

これを見ると、花嫁はよろこんで王子にキスして、王子を心からすきになりました。朝になると、王子はとび起きて、また、ろばの皮をかぶりました。すると、もう、ろばの皮の中に何が入っているのか、だれにもわからなくなりました。

まもなく、年とつた王さまが来て、

「おや、ろばの子はもう起きたのか」といいました。そして、王女に、

「おまえは、ちゃんとした人間を夫に持てなくて、悲しいだろうなあ」といいました。

「そんなことありませんわ、お父さま。あの方は、この世で一番すばらしい人です。わたしはあの方を心から愛しています。そして、一生、あの方を夫にしたいと思います」

王さまは、ふしぎに思いました。そこへ、ゆうべ、ものかげで様子をうかがっていた召使いが来て、自分が見たことをうちあげました。けれども王さまは、

「そんなことは、ぜったいにありえない」といいました。すると召使いはいいました。

「それでは王さま、今夜は、ご自分で見はりをして、ご自分の目でたしかめてください。あのろばの皮をうばって火にくべてください。そうすれば、ろばの子は、きっと、自分のほんとうの姿のまま、二度とろばにはならないでしょう」

王さまは、

「おまえの忠告は、なかなかよろしい」といいました。

そして、夜になってふたりが床につくと、王さまは、こっそり寝室へしのびこんでいきました。ベッドの近くまで行ってみると、月あかりの中に、気品のある若者が寝ているのが見えました。ろばの皮はぬぎすてられて、床に落ちています。そこで、王さまは、ろばの皮を持つてかえり、外で盛大に火をもやさせ、ろばの皮を火の中に投げこみました。そして、それがすっかりもえて灰になるまで、そばに立って見ていました。

王さまは、皮をうばわれた若者がどうするか知りたくて、ひと晩じゅう起きて、寝室の前で様子をうかがっていました。

若者はぐっすりねむり、朝日がさすと、とびおきて、ろばの皮を着ようとしました。けれども、ろばの皮はどこにも見つかりません。若者はびっくりして、悲しそうに、そして、心配そうにいいました。

「ああ、ぼくは、なんとかして、ここから逃げださなければならぬ」若者がそういって、寝室から出ていくと、そこに王さまが立っていて、いいました。

「おい、わが息子よ。そんなに急いでどこへ行くんだ。ここにいなさい。おまえは、そんなに美しい若者だ。おまえは、わたしのところから、去って行ってはいけない。わたしの王国を半分あたえる。そして、わたしが死んだら、国をぜんぶあたえよう」すると、若者がいいました。

「それでは、よい始めにはよい終わりがあることをねがって、あなたのもとに、とどまりましょ
う」

こうして、年とった王さまは、若者に王国を半分あたえました。一年たって、王さまが亡
くなると、若い王は、国をぜんぶゆずりうけました。そのうえ、自分の父親が亡くなると、
もうひとつ国がふえました。そうやって、若い王さまは、おきさきともにゆたかに、満足
して暮らしました。

出典 『語るためのグリム童話7 星の銀貨』（小峰書店 二〇〇七年） ただし頁組は

『昔話からのメッセージ ろばの子』（小澤昔ばなし研究所、二〇〇七年）を使用